

楊雄「蜀都賦」譯注

嘉 瀨 達 男

凡 例

一、底本には『古文苑』九卷（岱南閣叢書所收、孫星衍、覆宋淳熙刊本、略稱九卷本）を用い、以下の三書及び佚文により校訂した。ただし文字の混亂が甚だしいため、明らかな俗體以外の異體字も改めずに校記に録した。

『古文苑』二十一卷、章樵注（一九七三年、鼎文書局、影宋淳祐重修本、略稱二一卷本）

『古文苑』二十一卷、章樵注 附錢熙祚撰校勘記（叢書集成新編所收、影守山閣叢書本、略稱守山閣本）

『全上古秦漢三國六朝文』嚴可均（一九八五年、中華書局、略稱全漢文）

二、注釋および分段には次の文獻を参照した。

『揚雄集校注』張震澤（一九九三年、上海古籍出版社、略稱校注） 『新譯揚子雲集』葉幼明（一九九七年、三民書局）

『揚雄文集箋注』鄭文（二〇〇〇年、巴蜀書社）

『揚雄集校注』林貞愛（二〇〇一年、四川大學出版社）

『全漢賦評注』龔克昌他（二〇〇三年、花山文藝出版社）

『全漢賦校注』費振剛他（二〇〇五年、廣東教育出版社）

「揚雄《蜀都賦》詞語札記」華學誠・馬蓮（二〇〇八年、『語言科學』三三期、徐州師範大學語言所）
 「揚雄《蜀都賦》詞語注商」華學誠・馬蓮（二〇〇八年、『語言研究』二八卷二期、華中科技大學）
 三、韻字は羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究（第一分冊）』（科學出版社、一九五八年）に摘録されたもののみ丸印を附し、韻部と四聲を括弧内に示した。韻部に兩韻字を擧げているのは合韻である。

〔一〕

蜀都之地、古曰梁州。禹治其江、淳臯彌望、鬱乎青葱、沃壑千里。上稽乾度、則井絡儲精、下按地紀、則宮奠位。東有巴賈、綿亘百濮、銅梁金堂、火井龍湫。其中則有玉石簪岑、丹青玲瓏、叩節桃枝、石鱮水螭。南則有犍犍潛夷、昆明峩眉（脂平）、絕限嶮嶂、堪巖直翔。靈山揭其右、離堆被其東。於近則有瑕英菌芝、玉石江珠。於遠則有銀鉛錫碧、馬犀象焚。

西有鹽泉鐵冶、橘林銅陵。邛連盧池、澹漫波淪。其旁則有期牛兕旄、金馬碧鷄。北則有岷山、外羌白馬。獸則麕羊野麋、罷犛獬豸、麕麕鹿麝、戶豹能黃、獬胡雖獲、猿蠅獾獠、猶穀畢方。

①乎青葱、石鱮衰水螭：九卷本闕。據二二卷本、守山閣本補。②按：『全漢文』作「案」。③宮：『全漢文』作「坤」。④堂：『全漢文』作「臺」。⑤丹青玲瓏：『藝文類聚』卷六一（以下同）作「丹鳳青龍」。⑥叩：守山閣本、『全漢文』作「邛」。⑦嶮：九卷本作「岷」、據二二卷本、守山閣本改。⑧堆：守山閣本作「確」。⑨瑕英菌芝、玉石江珠：『文選』蜀都賦劉逵注作「瑕英江珠」。⑩於：守山閣本闕。⑪西有：『太平御覽』卷九六六作「於西則」、『事類賦』卷二七作「西則」。⑫漫：九卷本闕、注云「元空」。據二二卷本、守山閣本、『全漢文』補。⑬旁：『藝文類聚』作「傍」。⑭兕：『藝文類聚』作「光」。⑮麕：『全漢文』作「麕」。

⑩ 罽：九卷本作「罽」、據二一卷本、守山閣本、『全漢文』改。 ⑪ 獾：『全漢文』作「獾」。

蜀都の地、古へは梁州と曰ふ。禹其の江を治め、淳臯彌いよ望み、鬱乎たる青葱、沃壑千里なり。上乾の度を稽ふれば、則ち井絡は精を儲へ、下地の紀を按ずれば、則ち㐁(坤)宮は位を奠む。

東に巴賈有り、綿として百濮に亘り、銅梁・金堂、火井・龍湫あり。其の中に則ち玉石の睿岑、丹青の玲瓏、叩節・桃枝、石鱚・水螭有り。南には則ち犍・梓に潛・夷、昆明・峩眉有りて、限を嶮嶂に絶ち、堪巖として亶翊たり。靈山其の右を掲ひ、離堆其の東を被ふ。近きに於いては則ち瑕英・菌芝、玉石・江珠有り。遠きに於いては則ち銀・鉛・錫・碧、馬・犀・象・犢有り。

西に鹽泉・鐵冶、橘林・銅陵有り。邛(邛)は盧池に連なり、澹漫として波は淪む。其の旁には則ち期牛・兕・旄、金馬・碧鷄有り。北には則ち岷山有り、外に羌・白馬あり。獸に則ち麇羊・野麋、罷・犛・獬・獬、麋麋・鹿麋、戶豹・能黃、獬胡・雖(雌)獾、猿・蝮・獾、獾、猶・穀・畢方あり。

○蜀都：今の四川省成都市。(司馬相如「難蜀父老」) ○梁州：古代の九州の一。(『書』禹貢) ○淳臯：亭臯。水邊の平地。(司馬相如「上林賦」) ○青葱：綠色。(楊雄「甘泉賦」) ○乾：天のこと。(『易』說卦「乾、天也。」) ○稽度：はかり調べること。 ○井絡：二十八宿の一つ。ちちり。蜀に當る。(左思「蜀都賦」) ○儲精：精神を蓄え養う。(楊雄「甘泉賦」) ○㐁宮：九宮の一つ、坤宮。西南の蜀に當る。

○巴賈：巴中地域。 ○百濮：古代の西南地區少數民族を總稱して言う。 ○銅梁・金堂：ともに四川省にある山名。 ○火井：天然ガスを産出するガス田。(左思「蜀都賦」) ○龍湫：大きな淵をもつ瀧。 ○睿岑：深山の高峻なさま。(張衡「南都賦」) ○丹青：

丹砂と石青。(司馬相如「子虛賦」) ○玲瓏：明るく輝くさま。(楊雄「甘泉賦」) ○叩節：叩は邛の異體字。邛竹、竹の名。(左思「蜀都賦」) ○桃枝：竹の名。(『爾雅』釋草、左思「蜀都賦」) ○石鱧：チヨウザメ。(章樵注、司馬相如「上林賦」李奇注) ○牂牁に同じ。牂牁郡。○嶺嶂：章樵注「嶺嶂山、俗訛爲螳螂山、在朱提縣西南。」○堪巖：山の奥深いさま。○亶翔：舞い上がるさま。○靈山：章樵注「靈關山、在成都西南漢壽界。」(左思「吳都賦」) ○離堆：四川省南充市の山名。離堆ともいう。○瑕英：美玉。(左思「蜀都賦」) ○江珠：琥珀の別名。○菌芝：靈芝。○熨：古代の西南少數民族の名。○鹽泉：多量の鹽を含む泉。(左思「蜀都賦」) ○鐵冶：製鐵所。○橘林：古代の蜀にあつた名園。○銅陵：銅山のこと。○邛：章樵注「邛、即邛字。」(『後漢書』西南夷傳邛都縣有「邛池、南人以爲邛河」。) ○盧池：瀘水のこと。(校注) ○期牛：夔牛。古代に蜀にいた大牛。○旄：斄牛。ヤク。○金馬・碧鷄：馬の形をした金と鷄の形をした碧。寶物とされ、神名でもある。(『漢書』郊祀志下、『同』王褒傳) ○白馬：古代の西南少數民族の名。(『史記』西南夷列傳) ○巖羊：大羊。(『說文解字』十上) ○野麋：獐。ヘラジカ。○罷：罷。(『爾雅』釋獸) ○犛：犛牛。野牛。(『山海經』中山經・郭璞注) ○貌：白豹。(『爾雅』釋獸) ○猫：猪獾。アナグマ。(『本草綱目』獸二) ○麕麕：章樵注「音預餘。說文(十上)、似鹿而大。」○戶豹：ヒョウ。花豹。(華學誠・馬蓮「蜀都賦詞語札記」) ○能黃：黃能、即黃熊。(校注) ○獬胡：獬胡。ゴリラの類。(司馬相如「上林賦」) ○雖獲：雌獲。オナガザル。(司馬相如「上林賦」) ○蠹：鼯鼠。ムササビ。(張衡「南都賦」) ○獲獠：オオザル。(司馬相如「上林賦」) ○猶：サル。(『爾雅』釋獸) ○穀：コブタ。(司馬相如「上林賦」) ○畢方：傳説上の怪鳥。現れると火災になる。(『山海經』西山經)

蜀の都は、いにしえに梁州と言われました。上古の聖人 禹が蜀都を流れる大河を治めたので、沿岸がはるかにひらけ、緑が生い茂り、どこまでも豊かな土地となったのです。上方 天を仰ぎ測れば、蜀を示す星座は精氣をたくわ

えており、下方地を眺め治めれば、宮殿は西南にところを得ています。

東には巴中の地があり、さまざまな民族が各地に居住し、銅梁山や金堂山、ガス田や大きな瀧があります。そこでは玉や寶石が高くそびえて見上げるほどで、赤い色や青い色がひかり輝き、邛竹や桃枝といった竹が茂り、チョウザメやみずちがいます。南には犍爲郡、牂柯郡や潛水、夷水、昆明湖や峨眉山がありますが、螳螂山が境界をつくり、深く険しく天まで伸びています。靈關山が西をささえ、離堆山が東にそそりたっています。近いところでは美玉や靈芝、玉石・琥珀がとれます。遠いところでは銀や鉛、錫や碧がとれ、ウマやサイ、ゾウや僂人がいます。

西には鹽の泉や製鐵所、橘林園や銅山があります。邛河が瀘水に連なり、おだやかに流れさざ波をゆらしています。周邊には大牛やサイやヤク、傳説に言われる金の馬や碧い鶏がいます。北には岷山があり、域外には羌族や白馬族がいます。野獸に大羊やヘラジカ、ヒグマや野牛・白ヒョウ・アナグマ、大鹿やジャコウジカ、豹や黄熊、ゴリラやオナガザル、サルやムササビ・オオザル、サルや子豚・神鳥の畢方がいます。

〔二〕

爾乃蒼山隱天、^① 岌嶮迴叢、^② 增嶮重翠、^③ 岨石巖崔、^④ 寢避嶧嵬。^⑤ 霜雪終夏、^⑥ 叩巖吟嶙。^⑦ 崇隆臨柴、^⑧ 諸徼嶷峩。^⑨ 五硯參差、^⑩ 湔山巖巖、^⑪ 觀上岑嶺、^⑫ 龍陽累峩。^⑬

崔粲交倚、^⑭ 崔崒嶭崎、^⑮ 集嶮脇施、^⑯ 形精出偈、^⑰ 堪嶮隱倚。^⑱ 彭門鳴峩、^⑲ 岨嶭嶭岨、^⑳ 方彼碑地、^㉑ 岨岨輻輳。^㉒ (歌支上)、礫乎嶽嶽。^㉓ 北屬崑崙泰極、^㉔ 涌泉醴、^㉕ 凝水流津、^㉖ 漉集成川。^㉗

①蒼：九卷本、二一卷本、『全漢文』作「倉」。『文選』西都賦、南都賦、沈約「鍾山詩應西陽王敎」詩李善注、守山閣本共作「蒼」、

從之。②迴：二一卷本作「廻」。③霜雪終夏：『文選』南都賦李善注作「夏含霜雪」。④硃：九卷本作「硃」。『文選』蜀都賦劉逵注作「帆」、『全漢文』作「斫」。「硃」字、音義未詳。從二一卷本、守山閣本。⑤陽：守山閣本作「易」。⑥粲：守山閣本作「粲」。⑦鳴峴：『文選』蜀都賦劉逵注作「鴻帆」。⑧地：二一卷本、守山閣本作「池」。

爾して乃ち蒼山 天を隠し、岾嶮として迴り叢り、峩嶷を増し峩嶷し、峩嶷として峩嶷たり。霜雪は夏を終へしめ、巖を叩くこと嶢嶢たり。崇隆臨柴として、諸微は峩嶷たり。五硯は參差として、湔山は巖巖觀上は岑嶺として、龍陽は峩嶷きを累ぬ。

漼粲として交ごも倚り、崔嵬として峩嶷、嶮に集ひては脇に施し、精を形はし偈を出だし、堪嶠隠かに倚らしむ。彭門は鳴峴として、岾嶷にして峩嶷、彼に方たりて碑地し、岾嶷しては鞞嶷し、礫は嶽嶽たり。北のかた崑崙泰極に屬なり、涌泉は醴にして、水を凝らし津に流れ、漉し集まりて川を成す。

○蒼山：青山。○岾嶮：岑峯。山の高く険しいさま。(司馬相如「子虛賦」)○峩嶷：嶮に同じ。高く突出していること。○峩嶷：高く険峻なこと。○岾：山のこと。○峩嶷：山石の高く聳えるさま。○寢嶷・岾嶷：高く険しいさま。○嶢嶢：岩をうつ音。○崇隆：高く隆起していること。○臨柴：積み重なること。○微：境界、邊塞。(『史記』司馬相如傳)○峩嶷：整わないさま。(章樵注)○五硯：四川省樂山縣の南にある山名。「五帆」に同じ。(左思「蜀都賦」)○湔山・觀上・龍陽：いずれも山名。(章樵注)○巖巖：高大なさま。(『詩』魯頌・閟宮)○岑嶺：岑巖。山なみの険峻なさま。○峩嶷：高く険しいさま。○峩嶷：突出してそびえるさま。(司馬相如)○漼粲：漼潔。水が深く清澈なさま。○崔嵬：高く険しいさま。(張衡「西京賦」)○峩嶷：突出してそびえるさま。(司馬相如)○嶢嶢：險に同じ。○脇施：山の側面から四方に廣がること。(評注)○偈：光り輝くこと。(『太玄經』閟)○堪嶠：

堪は嶮、嵌に同じ。嶮とともに衆山の奇怪な形をいう。(章樵注) ○彭門：左思「蜀都賦」劉逵注云「岷山都安縣有兩山、相對立如闕、號曰彭門。」また楊雄「蜀王本紀」に見える。 ○嶋岨・岨嶇・岨岨：山なみが高く聳えること。 ○碑池：陂池。傾斜して下へ向かうさま。(司馬相如「上林賦」) ○岨岨：山々が連なり重なるさま。 ○輻岨：山なみがとぎれるさま。 ○礫：小石、碎石。(宋玉「高唐賦」) ○嶽嶽：屹立するさま。嶽嶽に同じ。(王逸「九思」憫上) ○涌泉：湧泉に同じ。水の噴き出る泉。(司馬相如「上林賦」)

そして青山は天を覆わんばかりで、高く険しく連なり、頂をせりあげて急峻を加え、岩石はいたるところで屹立し、峨峨としてそびえています。霜や雪は消えることなく夏の訪れを阻み、ただ巖いわおにしたたつて清らかな音をたてています。峰峰は交互に重なり、境界は入り組んでいます。五硯山は山なみを交錯させ、湔山は大らかにたたずみ、觀上山は險阻な山容で、龍陽山は高度をせり上げています。

水は深く方々より注ぎ込み、高峰は連なり突出してそびえており、峻山に当たっては脇に流れ、精氣が固まり美玉を生み出し、深山の奇峰の陰にかくしています。彭門の兩岩は高々と聳え、急峻の上に急峻を重ね、かなたで傾斜して下り、群山つらなつてはとぎれ、岩石は見あげんばかりです。北は崑崙山、太極へと續き、泉からは甘美な水が湧き出、流れが集まり入り江にいたり、結集して川となるのです。

〔三〕

於是乎則左沉犁、右羌庭、漆水滄其匈、都江漂其涇^①。乃溢乎通溝、洪濤溶沈^②、千浚萬谷、合流逆折、泌澗乎爭降^③。湖澮排碣、反波逆瀆。礫石冽岨、紛苒周溥。旋溺冤、綏頽慚^④。博岸敵呷、粹瀨磴巖。檜汾汾^⑤、忽溶闔沛。踰窘出限、

連混陁隧、銓釘鍾涌、聲謹薄汧龍。歷豐隆、潛潛延延、雷扶電擊。鴻鴻康濞、速遠乎長喻。馳山下卒、湍降疾流、分川竝注、合乎江州（幽平）。

①涇：『全漢文』作「脛」。②沈：守山閣本作「洗」。③泌：九卷本、『全漢文』作「必」、據二卷本、守山閣本改。④慚、搏：『全漢文』作「甄搏」。⑤檜：守山閣本作「攄」。⑥纷纷：『全漢文』作「汾」。⑦鍾：九卷本、『全漢文』作「鐘」、據二卷本、守山閣本改。⑧潛潛延延：九卷本作「潛潛」、下空五格、原注云「元空」。據二卷本、守山閣本改。『全漢文』作「潛延」。⑨扶：守山閣本作「扶」。⑩鴻鴻康濞：二卷本、守山閣本作「鴻康濞」。⑪速遠：守山閣本作「遠遠」。⑫州：『文選』蜀都賦劉逵注作「洲」。

是に於いて則ち沉犁を左にし、羌庭を右にし、漆水は其の匈を淳し、都江は其の涇を漂はす。乃ち通溝に溢れ、洪濤は溶として沈、千溪萬谷、合流し逆折し、泌澗乎として争ひ降る。湖は澒（増）して碣を排し、波を反し逆濤す。礫石は嘯に冽たく、紛苒として周溥す。旋り溺るるものは冤み、綏ち頽るるものは慚づ。岸を搏（搏）ち呷（呷）を敵ち、瀨に粹（粹）れ巖を磴（磴）る。檜むこと纷纷として、忽ち溶として闔たり沛たり。寤きを踰え限を出で、連なり混じ、陁き隧り、銓釘として鍾まり涌き、聲の謹しく薄ること汧たり龍たり。豐隆を歴ること、潛潛延延、雷の扶ち電の撃つがごとし。鴻鴻康濞、速やかに遠ざかり長く喻す。山を馳せること下卒のごとく、湍く降り疾く流れ、川を分かち竝び注ぎ、江州に合す。

○沉犁：古代の郡名。今の四川省西昌市。（『史記』西南夷列傳）○羌庭：羌族の居る地域。（林氏校注）○漆：章樵注「漆」

恐當作「沫」音味。說文曰「沫水出蜀西塞外、東南入江。」章注に「沫音味」と言うのは「沫音末」の誤りであろう。說文には「沫水出蜀西徼外、東南入江。従水、末聲、莫割切」とある。また漆字は質韻、沫字は月韻である。○淳其匈：章樵注「謂涌其前也。」

○涇：まっすぐに上がる波。（『詩』大雅・鳧鷖）○通溝：水路。（班固「西都賦」、左思「魏都賦」）○洪濤：大きな波濤。

○溶：水の豊かなさま。（『說文解字』十一上）○沈：深いこと。（司馬相如「難蜀父老文」）○湲：水の流れるさま。○逆折：

水流のめぐるさま。（司馬相如「上林賦」）○泌澗：波が激しくぶつかるさま。（司馬相如「上林賦」）○澮：校注「同増、謂湖水

上漲。」○碣：そそり立つ山。（楊雄「校獵賦」顏師古注）○排：推す。當たる。○逆凜：波が逆巻きとどろくこと。○礫：礫

に同じ。○冽：寒冷なこと。（『詩』曹風・下泉）○巘：山々の峰。（『詩』大雅・公劉、張衡「西京賦」）○紛苒：紛拏、紛如、

煩拏に同じ。入り亂れ錯雜するさま。○周溥：あまねく廣まるさま。○旋溺冤、綏頹慚：章樵注「水觸石抵山則波濤洄狀、舟

行人旋溺而死者冤、綏頹而恐者慚。」○博・呶：校注「博借爲搏。呶借爲呶。兩山之間爲呶。言流水搏擊兩岸、抵敵兩山。」○粹：

校注「當爲粹字之誤。」粹は觸れる、ぶつかる。（左思「吳都賦」）○磴：磴に同じ。登ること。○槿：とめる、はばむ。○汾：

紛に通ず。盛んで多いさま。○闐：盛んなさま。（『說文解字』十二上）○沛：水のゆたかなさま。○窘：狹隘なこと。○陔：

傾斜するさま。（司馬相如「子虛賦」）○隧：回轉すること。（『詩』大雅・桑柔）○銓釘：水音の擬聲語。（校注）○鍾：集まる

こと。○謹：音が大きく騒がしいこと。○泮・龍：水の音。○豐隆：雷のこと。（『楚辭』離騷）○潛潛：水の流れるさま。

○扶：むち打つこと。（楊雄「甘泉賦」）○鴻鴻：廣大なさま。○康濫：沆漑に同じ（校注・箋注）。水がゆつくり流れること。（司

馬相如「上林賦」）○湍：水が激しくなされること。○江州：漢代巴郡におかれた縣名。楊雄の祖先がかつて居た。（『漢書』楊

雄傳）

そこで沱江郡を東にし、羌族地區を西にすると、沫水の流れは高々とうねり、都江堰は波しぶきを上げています。

そして水路に水はあふれ、大波は豊かにまた深く、無数の水流があらゆる谷へ向かい、波寄せては逆巻き、碎けては流れ落ちていきます。湖は水が漲り石碣に波が打ち寄せ、押し寄せては激しい音を上げます。砂礫は寒冷な山間のいたるところで入り亂れ散亂しています。波に巻き込まれ溺れた者は恨み、水中に轉落し沈んだ者は悔います。流れは岸に寄せ岬にぶつかり、早瀬を抜け巖をのみこみます。(流れが)押しとどめられせり上がると、まもなく大きくみなぎります。いたるところどこまでも廣がり、渾然と入り混じって巡り、ごうごうと流れを集めて下り、轟音はざあざあところらに迫ってきます。雷鳴以上に響きわたり、どうどうとほとばしり、雷が撃ちつけ稻妻が突き刺すようです。悠々と下り行き、またたく間に遠ざかり、どこまでも流れを導いて行きます。山を流れ下ること兵卒のごとく、速やかにしり一氣に落ち、水流を左右に分けてすすみ、江州に注ぎ込みます。

〔四〕

於木則梗櫟、豫章樹榜、檣櫨樺柎^①、青稚雕梓、粉梧樞櫨^②、榭檣木櫻^③、榭信揖叢、俊幹湊集。枇檣快楫、圮沈檣椅。從風推參、循崖掇掇。涇搖溶溶、繽紛幼靡、汎閱野望、芒芒菲菲。

其竹則鍾龍茶篔、野篠紛鬯。宗生族攢、俊茂豐美、洪溶忿葦(脂平)、紛揚搔翁、與風披拖。夾江緣山、尋卒而起。結根才業、填衍迴野。若此者、方乎數千百里(之上)。

於汜則汪汪漾漾、積土崇堤^④。其淺濕則生蒼葭蔣蒲、藿芋青蘋、草葉蓮藕、茱華菱根。其中則有翡翠鴛鴦、鳧鷖鷓鴣、震鷓鷓鴣。其深則有獼獼沈鱗、水豹蛟蛇^⑤、龜鱉鼈龜、衆鱗鰯鱗(歌支平)。

① 檣：九卷本、二二卷本、『全漢文』作「檣」、據守山閣本改。

② 柎：九卷本、『全漢文』作「柎」、據二二卷本、守山閣本改。

③ 櫨：

九卷本作「摳」、據二二卷本、守山閣本、『全漢文』改。④櫓：九卷本作「櫓」、據二二卷本、守山閣本、『全漢文』改。⑤櫻：九卷本、二二卷本、『全漢文』作「櫻」、據守山閣本改。⑥揖：守山閣本作「揖」。⑦循：九卷本闕、據二二卷本、守山閣本、『全漢文』補。⑧涇搖溶溶：守山閣本作「涇涇溶溶」、『全漢文』作「淫淫溶溶」。⑨紛揚搔翁、與風披拖：守山閣本作「紛揚榼合柯無風披」。⑩揚：九卷本作「楊」、據二二卷本、守山閣本、『全漢文』改。⑪迴：二二卷本、守山閣本作「迴」。⑫千百：「千」字、二二卷本、守山閣本作「十」。『全漢文』闕「百」字。⑬汪汪：九卷本、二二卷本、『全漢文』作「注注」、據守山閣本改。⑭堤：二二卷本、守山閣本、『全漢文』作「隄」。⑮蛇：『文選』西京賦李善注作「蛇也」。

木に於いては則ち榿・櫟、豫章・樹榜、檜・櫨・樺・柶、青稚・雕梓、粉・梧・檣・摳、檠・檣・木櫻あり。枿は信び揖まり叢り、俊き幹湊集す。枇・檘・枿・柶・櫨、坵として沈く檣椅し、風に従ひ推し參はり、崖に循ひ摳り掬る。涇のごと揺れること溶溶、繽紛として幼靡、閑野に汎く望み、芒芒菲菲たり。

其の竹は則ち鍾龍・筵・篠、紛れ鬯ぶ。宗生し族がり攢まり、俊茂豊美にして、洪溶忿葦、紛揚して搔ぎ翁まり、風と與に披きては拖く。江を夾み山に縁り、卒きるを尋ぎて起ち、根を結び才く業く、迴か野に填ち衍る。此くのごとき者、方乎として數千百里なり。

汜に於いては則ち汪汪漾漾、土を積み堤を崇くす。其の淺く濕れるには則ち蒼き葭・蔣・蒲、藿・芋・青蘋を生じ、草葉に蓮・藕、茱華・菱根あり。其の中には則ち翡翠・鴛鴦、裊・鷓・鷺、鸞・鵠・鸚鵡、鸚鵡有り。其の深きには則ち獼猴・沈鯉、水豹・蛟蛇、龜・鱉・龜、衆鱗・鰓・鱗有り。

○榿・豫章：くすの木。 ○櫟：くぬぎ。 ○榜：校注「借爲枋。枋、檀樹。」まゆみ。 ○檜：榕の譌字。榕は李に似た果名。

○柶：香木の名。(張衡「南都賦」) ○稚：校注「稚」疑「杞」之借。↳「杞梓」多連稱。「杞は、くこ。 ○榘：榘榘、木の下枝のこと。『玉篇』木部) ○枒：椰に同じ。果木名。(左思「吳都賦」) ○信：伸に同じ。伸びる。 ○揖：輯に同じ。集まる。 ○枇：くすのき。 ○櫟：白棗。また榆とも。 ○枿：校注「枿非木名、當爲枿字之訛。杏也。」 ○楛：校注「未詳何木。」 ○圮：垓圮。際限ないさま。 ○檜：密集し相互に支え合うさま。(校注) ○撮：撮の異體字。群れあつまる。 ○掇：縈。からみつく。めぐる。 ○涇：波。 ○溶溶：水流の大きく盛んなさま。(劉向「九歎」逢紛) ○續紛：盛んなさま。(『楚辭』離騷) ○幼靡：章樵注「幼讀作窈、窈靡、深密也。」深く緊密なこと。 ○芒芒：廣大なさま。(『詩』商頌・長發) ○菲菲：揺れ動いて定まらないこと。 ○鍾籠：竹名。(李衍『竹譜』六) ○笱：竹名。(戴凱之『竹譜』) ○篔：校注「篔乃篔之誤字。」篔は鍾籠(鐘籠)とともに張衡「南都賦」に見える竹名。 ○鬯：暢に通ず。(楊雄「校獵賦」) ○宗生：叢生。群生すること。(左思「吳都賦」) ○攢：聚集。集まること。(司馬相如「上林賦」) ○洪溶：水のゆたかなさま。 ○忿葦：美しいさま。 ○紛揚：揺れ動くさま。(劉向「九歎」逢紛) ○搔：騷、さわぐ。 ○拖：ひく。ひっぱる。 ○汪汪：深く廣大なさま。水のみなぎるさま。 ○漾漾：揺れ動くさま。 ○蔣・草葉・蓮・藕・茱華・菱：章樵注「蔣、菰也。草葉、藻也。蘋藻以供祭祀之菹。茱華、芙蓉也、其實蓮、其根藕。菱根可爲菜茹。」 ○青蘋：淺瀬に生える草本植物の名。(宋玉「風賦」) ○裊：章樵注「水鳥名。」校注「當爲鳩字之訛。」新譯「疑爲鳧字之譌。鳧、野鴨。」 ○鷗：鷗鷺。鷺。(張衡「南都賦」) ○鷓：サギに似た大型の水鳥の名。 ○覆：校注「即鷓字。鷓古鷓字。」 ○鷓：大型の鳥。(張衡「西京賦」) ○鷓鷃：雁の一種。(『楚辭』大招) ○獼獼：カワウソの類。 ○沈鰾：鰾は長江ワニ。校注「沈鰾、沈於水中之鰾。」 ○水豹：アザラシの類。(張衡「西京賦」) ○鱣：ワニの一種。 ○鱣：シナ大山椒魚。 ○鱣：鱣、鱣に同じ。大龜のこと。(張衡「南都賦」)

樹木では、楠やくぬぎ、樟やまゆみ、すもも・豆の木・つげ・香木の柶、くこ・あずさ、しろにれ・あおぎり・か

し・くぬぎ、小樹・なら・いちいなどがあります。やしは葉を伸ばして生い茂り、幹は高々と連なっています。くすのき・櫟・柞・榎などの木々は、廣く深くそれぞれ寄り添い、風になびいて揺れ動き、山肌に沿って群生し絡み合っています。大きな波のようにうねうねと揺れ、盛り上がっては渾然となり、廣く廣く野を眺め、果てしなくゆらめいています。

竹では鍾籠・茶・籬や、野生の篠が盛んに茂っています。竹林をなして群生し、こんもりとみごとに繁り、豊かな波となり美しくゆれ、揺らめいてはあつまり、風とともに廣がっては引き戻されています。大河をさしはさんで山沿いに生え廣がり、倒れたものの後に生い立ち、根を廣げて高くそびえ立ち、はるかかなたまで野に満ち溢れています。そしてこうした風景が數百里四方に及んでいます。

水邊ではゆたかな流れがゆらめき、土手を積みあげ堤を高くしています。淺瀬の濕地には青々としたアシ、まこも、がま、かわみどり、みくり、浮き草が生い茂り、藻の中にはハスの實や根、蓮の花に菱の根が伸びています。水邊の茂みにはカワセミ・オシドリ、鳧やウ・鶴・サギ、鶴や鴨や雁などの鳥がいます。水中にはカワウソや長江ワニが潛み、アザラシや蛟、スッポンやワニやウミガメやカメ、多數の水生動物・シナ大山椒魚や大龜がいます。

〔佚句〕

この段の終わりに『全漢文』は『文選』李善注に三たび引用される次の佚句が置かれるべきであると言ひ、本稿の参照した注釋書も全て従っている。しかし同じ句はまた楊雄「太玄賦」にもある。

『文選』郭璞「江賦」李善注所引佚句。

蚌含珠而擘裂^{①②}

①蚌：張衡「南都賦」李善注、曹植「七啓」李善注作「蚌」。②含：張衡「南都賦」李善注作「函」。

蚌^{はう}珠を含みて擘裂^{はくれつ}す。

○蚌：からす貝の一種。溝貝。○含珠：含玉。口中に珠を含むこと。葬禮の際、死者に行う習慣がある。「生不布施、死何含珠爲」(『莊子』外物)。張衡「南都賦」に「巨蚌函珠、駁瑕委蛇」とある。○擘裂：ひきさく。つんざく。

カラス貝は眞珠を内にもつために引き裂かれます。

〔五〕

爾乃其都門二九、四百餘閭^①。兩江珥其市、九橋帶其流。武儋鎮都、刻削成斂。王基既夷、蜀侯尙叢^③。并石石牘、岍岑倚從。秦漢之徙、元以山東^④。是以隕山、厥饒水貢、其獲苴竹。浮流龜鼈^⑤、竹石蝸相救、魚酌不收^⑥(幽去)。鸞鶴^⑦鴈鷁、風胎雨鷁。衆物駭目、單不知所禦。

①閭：『玉海』卷一六九作「間」。②珥其市：「珥」字、九卷本、『藝文類聚』作「飾」、據二二卷本・守山閣本改。又『文選』蜀都賦李善注、『全漢文』「飾其市」作「珥其前」。③蜀：九卷本作「獨」、據二二卷本・守山閣本改。④元：『文選』魏都賦李

善注、『全漢文』作「充」。⑤龜鼈：諸本作「龜磧」、據『藝文類聚』改。又『全漢文』作「磧龜鼈」。⑥竹：『藝文類聚』闕。
⑦鶴：『全漢文』作「鰲」。

爾して乃ち其の都門は二九、四百餘閭あり。兩江 其の市を珥さしはさみ、九橋は其の流れに帶ぶ。武儻たんだんは都を鎮め、刻削して蔽れんを成す。王基は既に夷たひらかにして、蜀侯は叢しやうに尙す。石を并ならべて石に厝すみ、岍あつ岑あつ 從あつを倚たす。秦漢の徙はじるや、元はじめ山の東を以てす。是を以て山を隤くすし、厥それ水の貢すむるを饒めくらし、其れ苴そ・竹を獲る。流れに龜・鼈を浮かべ、竹石(若)・蝸相ひ救ひひ、魚酌すれども收めず。鸞よ・鶴こう・鵠く・鷓わう、風に胎はらみ雨はくに敷くむ。衆物の目を駭ひとかすも、單ひとへに禦く所を知らず。

○二九：十八。(楊雄『太玄』圖) ○閭：巷中の門。 ○武儻：儻は擔の異體字。武擔は蜀王の妃が葬られた山名。『後漢書』方術(任文公)傳注「武擔山在今益州成都縣北百二十步。楊雄蜀王本紀云、武都丈夫化爲女子、顔色美絶、蓋山精也。蜀王納以爲妃、無幾物故。乃發卒之武都擔土、葬於成都郭中、號曰武擔。以石作鏡一枚、表其墓。」 ○蔽：章樵注「草木叢蔓也。」 ○尙叢：章樵注「賦言蜀都之王基既平、蜀侯通始封、可配蠶叢之王。尙、配也。」 ○并石石厝：章樵注「(『後漢書』)西南夷傳、汶山郡衆邑皆依山居上、累石爲室、高者至十餘丈、爲叩籠。先蜀記云、蠶叢始居岷山石室中。厝古厝字、與棲同。」 ○岍岑倚從：章樵注「岍、渠希反、山傍石也。從、讀作蹤。」 ○秦漢之徙、元以山東：章樵注「成都由秦漢而徙、謂惠王及武帝時。其始基在山之東、謂蠶叢・望帝、皆治郫城、在岷山之陽也。」 ○苴：章樵注「苴、麻也。水運則蔽流積於水、次則龜磧、言麻竹之多。」 ○竹石：章樵注「上文已有竹、不應再舉。『竹石』疑是合爲「若」字。杜若、香草。蝸、蝨蟲。二者藥材、柔猛之性、相濟、舉細微以見百物富羨。」杜若はヤブミヨウガのこと。 ○魚酌：魚をとること。 ○風胎：古代の考え方で、ある種の鳥類について交配を経ずに懷胎することをいう。

そして蜀の都の城門は十八を數え、四百あまりの小門があります。二つの大河が城市をさしはさみ、九つの橋がその流れをおおっています。(蜀王の妃が葬られる)武儋が都に安寧をもたらし、切り開かれて草木が繁茂しました。王室の基盤はすでに安定しており、(秦の封じた)蜀侯は蠶叢をめぐりました。(その頃は)岩を積みあげ岩窟に棲み、岩の峰に取り付いていました。秦漢の時に人々が移り住んだ当初は、山脈の東側にいました。そして山を切り崩し、河の恵みを遍くすすめ、麻や竹を取っていました。流れには龜やスッポンが泳ぎ、ヤブミヨウガやサソリは(薬材として)相互に補完しますが、これらを手に入れても多く蓄えることはしませんでした。鷺・ワシ・ミミズク・凰は、風に孕み雨に殖えます。(他にも)多くのものが人を驚かせますが、とても舉げきれません。

〔六〕

爾乃其裸^①、羅諸圃^②。緣畛。黃甘・諸柘、柿桃李、枇杷杜櫛、栗榛棠梨^③、離支。雜以椀橙、被以櫻梅、樹以木蘭、扶林禽、燠般關、旁支何若、英絡其間。春机楊柳、襄弱蟬抄^④、扶施連卷、貍猓糖蟻、子騶呼焉。爾乃五穀馮戎^⑤、瓜瓠饒多^⑥、卉以部麻^⑦、往往薑梔^⑧、附子巨蒜、木艾椒籬^⑨。藹醬醪清、衆獻儲斯(歌支平)。盛冬育筍^⑩、舊菜增伽。百華投春、隆隱芬芳^⑪、蔓茗熒郁^⑫、翠紫青黃、麗靡摛燭^⑬、若揮錦布繡、望芒芒兮無幅^⑭。

①裸：二二卷本、守山閣本、『全漢文』作「裸」。『全漢文』注云「疑「果」」。②圃：校注、守山閣本作「政」。③榛：二二卷本、守山閣本作「櫛」。『全漢文』作「柘」。④梨：九卷本作「黎」、二二卷本作「梨」、守山閣本、『全漢文』作「黎」。據校注改。

⑤抄：『全漢文』作「杪」。⑥騶：九卷本作「騶」、『全漢文』作「騶」、據二二卷本、守山閣本改。⑦穀：守山閣本、『全漢文』作「穀」。

⑧瓠：守山閣本作「匏」。⑨梔：九卷本作「梔」。⑩筍：九卷本、二二卷本、守山閣本作「荀」、據『全漢文』改。⑪隆隱芬芳：

『藝文類聚』作「隆急芳芬」。『全漢文』「芬芳」作「分芳」。⑫蔓茗熒々兮無幅：『太平御覽』卷九七七作「萬條巒翠萼青黃、若摘錦布繡、望之無疆」。⑬蔓茗熒郁、翠紫青黃：九卷本作「蔓茗熒、翠蕊青黃」、『全漢文』作「蔓茗熒翠、藻蕊青黃」。據二二卷本、守山閣本改。⑭摘燭：九卷本、二二卷本、守山閣本作「摘燭」。據『文選』西都賦李善注、『全漢文』改。⑮望芒芒兮無幅：九卷本作「望芒芒子於無鹽」、二二卷本・守山閣本・『全漢文』作「望芒兮無幅」。據『藝文類聚』改。

爾して乃ち其の裸は、諸の圃政に羅なり、眈に縁る。黃甘・諸柘・柿・桃・杏・李、枇杷・杜・櫨・栗・榛・棠梨、離支あり。雜ふるに梔橙を以てし、被ふに櫻梅を以てし、樹つるに木蘭を以てし、林禽を扶け、般關を燻らせ、旁支は何若、英は其の間に絡まる。春には机・楊柳、衰弱として蟬抄し、扶施として連卷、貍豸・糖蟻、子鷓呼ばふ。爾して乃ち五穀の馮戎にして、瓜瓠は饒多、卉は以て麻を部け、往往にして薑・梔、附子・巨蒜、木艾・椒・藜あり。藹醬・醪清、衆は獻じ斯れを儲ふ。盛冬に筍を育て、舊菜に伽を増す。百華の春に投ずれば、隆んに芬芳を隠し、蔓茗は熒郁して、翠・紫・青・黃、麗靡なること燭を摘ぐがごとく、錦布の繡を揮るふがごとく、望めば芒芒として幅無し。

○裸：章樵注「字亦作「蕪」、果蕪也。」蕪はウリなど地面のつるに成る果實。○政：章樵注「音匡、圃之四圍也。」畑の圍い。
○黃甘：黃柑。(司馬相如「上林賦」) ○諸柘：諸蔗。甘蔗。サトウキビ。(司馬相如「子虛賦」) ○櫨：榛。ハシバミ。(左思「蜀都賦」)
○榛：櫨、奈も同じ。カラナシ。○棠梨：野梨。ナシ。○離支：離枝。荔枝。(司馬相如「上林賦」) ○梔橙：章樵注「柚屬。」
○般關：古代の良質な梨の名。○旁支：傍枝。わき枝。○机：檜。ハンノキ。(『山海經』北山經) ○衰弱：衰弱。細くやわらかいさま。○蟬抄：枝が引き合うこと。(章樵注) ○扶施：校注「即扶疏。施、疏一聲之轉。司馬相如・上林賦「垂條扶疏、落

英幡纒（師古曰「扶疏、四布也。」四方に廣がること。連卷：長く曲がるさま。（司馬相如「上林賦」） ○豺豨：豺、蝮、蟻蛄に同じ。セミ。（『方言』十一） ○糖蟻：蟻、胡蟬とも言い（『方言』十一郭璞注）、ヒグラシのこと。 ○鱧：子規、杜宇、ホトトギス。蜀王望帝は死後この鳥に化したという。（章樵注）

○馮戎：豊穰なさま。 ○瓜瓠：廣く瓜類の作物を言う。 ○部麻：校注「麻有多种、此謂分區生長之麻。」 ○藟醬：枸椹醬、枸醬、蒟醬とも言い、キンマのこと。南方で用いられる、嚙む嗜好品。（『史記』西南夷傳） ○醪清：醪釀酒。かすを取らない酒。トビ。 ○冬筍：地面より現れる前の冬の筍。『東觀漢記』十二に好事家であつた馬援が好んだ話が見える。 ○伽：茄子のこと。（章樵注） ○投：合う、かなうの意。 ○癸郁：繁茂するさま。 ○芒芒：廣大なさま。はるかに廣がるさま。

そして蜀の果實は、あちこちの畑の周圍にあふれ、畦に沿つて實つています。柑子（こうじ）ミカン・砂糖キビ、柿・桃・杏（あんず）・李（なし）、ビワ・ヤマナシ・ハシバミ、栗・カラナシ・ナシ、荔枝があります。ほかに柚子があり、櫻や梅も廣くおい、木蘭が高く伸び、リンゴの木を支え、上質な梨を輝かせ、わき枝はどう茂っているかといえ、花々が間にからまるように咲いています。春にはハンノキや楊柳が、なよなよと引き寄せあい、廣く四方にくねり、セミ（ひぐらし）や蝸、ホトトギスが鳴いています。

そして五穀は豊かに實り、瓜の類も十分にでき、草類は麻を分類するほど（多様）で、ショウガやクチナシ、トリカブト・ニンニク、ヨモギ・山椒・せんきゅうをしばしば見かけます。そしてキンマや醪釀酒を、人々は獻じそなえます。真冬にはタケノコを育て、舊年の野菜のほかに茄子が加わります。さまざまな花は春になると、溢れんばかりの香りを人知れずたくわえ、ツタや茶がいよいよ茂り、みどりや紫、あおや黄色、その麗しく輝くさまは蠟燭を敷きつらねたかのようにあり、刺繡のほどこされた錦の布を振るかのようで、はるかかなたまで限りなく見わたすことが

できます。

〔七〕

爾乃其人、自造奇錦、紉纒纏緝、繆緣廬中、發文揚采、轉代無窮。其布則細都弱折、綿繭成衽、阿麗織靡、避晏與陰。蜘蛛作絲、不可見風、箛中黃潤、一端數金。

雕鏤釳器、百伎千工、東西鱗集、南北竝湊、馳相逢、周流往來。方轅齊轂、隱軫幽輻、埃敦塵拂。萬端異類、崇戎總濃、般旋闐齊嗜楚、而喉不感槩。萬物更湊、四時迭代、彼不折貨、我罔之械、財用饒贍、蓄積備具（之脂去）。

①都：『太平御覽』卷八二〇、『全漢文』作「締」。②蜘蛛：『後漢書』卷四九李賢注作「布則蜘蛛」。③箛：『文選』蜀都賦

劉逵注作「筒」。④雕：『太平御覽』卷七五六作「彫」。⑤釳：『全漢文』作「鉛」。⑥器、百伎千工：九卷本闕此五字、原注云

「二作鉛」。據二卷本、守山閣本補。又「伎」字、『藝文類聚』作「技」。⑦馳相逢：二卷本、守山閣本、『全漢文』作「馳逐相

逢」。⑧隱軫幽輻：『文選』西京賦李善注、『全漢文』作「隱軫軫軫」。⑨嗜：九卷本、二卷本作「嗜」。「嗜」音義未詳、據守山

閣本、『全漢文』改。⑩之：『全漢文』作「乏」。

爾して乃ち其の人は、自ら奇しき錦を造り、紉・纒・纏・緝あり、繆緣にして廬中、文を發し采を揚げ、代を轉ずるも窮まり無し。其の布は則ち細やかにして都しく弱くして折れ、綿・繭は衽を成し、阿（婀）やかにして麗しく織靡にして、晏と陰とを避く。蜘蛛は絲を作り、風に見ふべからざるも、箛中・黃潤は、一端にて數金なり。

釳器に雕鏤し、百伎千工、東西より鱗集し、南北より竝湊し、馳せては相ひ逢ひ、往來を周流す。轅を方轂を齊

しくして、いんしん隱軫なることいっあつ幽輻、埃はわ救き塵は拂はる。萬端異類、崇くおほ戎いにして總べて濃く、般旋すること齊にくわい闡し楚にたふ嗜し、而るに喉は感槩せず。萬物はこも更あつこも湊まり、四時はたが迭ひに代はり、彼は貨を折らず、我は之れにかせ械するとな罔く、財用は饒贍にして、蓄積は備具す。

○紉・纒・纏・緝：いずれも蜀錦の名。 ○縵：文様のある織物。 ○盧：黒色。 ○都：美しい。（『楚辭』九章・悲回風） ○繭：眞綿。 ○阿：婀に通ず。 たおやか。 ○晏陰：晴れと曇り。 ○箛中・黄潤：ともに古代の布の名。（左思「蜀都賦」劉逵注） ○雕鏤：彫刻すること。 ○釦器：金や玉などがはめこまれた器物。 ○隱軫：隱賑に同じ。 にぎわうこと。 ○幽輻：車のきしむ音をあらわす擬音語。（楊雄「校獵賦」） ○救：勃興し旺盛なこと。 ○戎：大きいこと。（『書』盤庚上） ○闡：市街の門。 また、市街のこと。（張衡「西京賦」） ○般旋：盤旋。 ぐるぐる回る。 ○嗜：沓に同じ。 言葉が入り混じり、がやがやすること。 ○感槩：感情が高ぶること。 章樵注「蜀物豊羨、負販者多、齊楚之人還至都市、喧譁而爭售之。」 ○折貨：商品を損なうこと。（『淮南子』齊俗訓） ○械：禁制。 ○饒贍：財産の十分あること。 ○備具：『漢魏晉南北朝韻部演變研究』が「具」ではなく「備」を韻字とする理由は、句讀の相違かもしれないが不明。

そして蜀の人々は、珍しい錦をみずから作り、きう紉・せん纒・ひ纏・けつ緝などの種類があり、中央に黒を配して文様で縁どり、文飾あきらかに彩りもあざやかに、幾世を経ても見事なこと變わりありません。その生地は精緻で美しくやわらかくしなやかで、木綿や眞綿で襟をつくり、たおやかで麗しく細やかで華麗、それでいて日差しも陰雨もしのげます。クモが絲を作っても、風は吹きぬけますが、箛中や黄潤といった布は、一端ほどでも數金の値打ちがあります。

金や玉のはめ込まれた器物には彫刻が施され、多様な技術をもつ多數の職人が、四方からやって来て、各地より集

まり、集い合つては、往來を行き來してゐます。車馬は並び馳せ競うように、ガラガラと賑わい、ほこりは舞い塵は除かれます。さまざまの物あらゆる種類は、高く大きくいずれも上質で、それが（市場を）行き來して齊の街に行つたり楚の言葉で語られますが、聲は激昂しません。あらゆるものは代わる代わる集まり、季節が次々に移つても、商品は損なわれることなく、禁制を加えられることもなく、資産は潤澤で、蓄財を重ね缺けるものはありません。

〔八〕

若夫慈孫孝子、宗厥祖禰、鬼神祭祀、練時選日、瀝豫齊戒、龍明衣、表玄穀、儷吉日、異清濁、合疎明、綏離旅。乃使有伊之徒、調夫五味、甘甜之和、勻藥之羹。江東鮐鮑、隴西牛羊。糴米肥膾、麇麇不行。鴻狹獐乳、獨竹孤鶻、炮鴉、被紕之胎、山鬻髓腦、水遊之腴、蜂豚應鴈、被鶉晨鳧（魚平）、戮鴉初乳、山鶴既交、春羔秋腳、膾鮫龜肴。杭田孺鶯、形不及勞、五肉七菜、朦獸腥臊（宵平）。可以練神養血脈者、莫不畢陳。

- ①鬼神祭祀：九卷本作「鬼祭祀」、據二一卷本、守山閣本、『全漢文』補「神」字。 ②玄穀：九卷本、二一卷本作「玄穀」、守山閣本作「元穀」。據『全漢文』改。 ③乃：『藝文類聚』作「上乃」。 ④甘甜之和、莫不畢陳：『北堂書鈔』卷一四二作「甘甜之和、芍藥之羹、江東鮐鮑、隴西牛羊、糴米肥膾、獨草孤鶻、鳩鶉初乳、山鶴交秋、魁膾鮫龜、稅田乳鶯、制不及勞、五肉七菜、勝膾鶉鶯、可以頤精神養血脈者、不可除也。」又『同』卷一四二「制」作「刑」、「勝」作「勝」。 ⑤膾：九卷本作「嗜」、『全漢文』作「豬」、據二一卷本、守山閣本改。 ⑥被鶉晨鳧：九卷本作「孺擊被鶉鳧」、據二一卷本、守山閣本、『全漢文』改。 ⑦獸：守山閣本作「厭」。 ⑧練：『全漢文』作「頤精」。 ⑨脈：九卷本、二一卷本作「睡」、守山閣本作「脉」、從『全漢文』。

若し夫れ慈孫孝子は、厥の祖禰を宗とし、鬼神の祭祀には、時を練り日を選び、瀝もて豫め齊戒し、明衣を龍（襲）ね、玄穀を表にし、吉日を儷べ、清濁を異にし、疎明を合はせ、離と旅を綏んず。

乃ち有伊の徒をして、夫の五味、甘甜的和、勺藥の羹を調へしむ。江東の鮐鮑、隴西の牛羊あり。糴米もて脂を肥へしむるも、麇・麇は行はれず。鴻臚・獐乳、獨竹・孤鷓、鴉を炮り、紙（豨）の胎を被（披）き、山麇の髓腦、水遊の腴、蜂（封）いなる豚・應じたる鴈、被鷓・晨鳧、戮（鶴）鴉の初めて乳める、山鶴の既に交はり、春の羔に秋の鰾、鯪を膾にし龜の肴あり。杭田の孺鷺、形の勞るるに及ばず、五肉七菜、臙にも腥臊を馱ふ。以て神を練り血脈を養ふべき者、畢く陳べざるは莫し。

○祖禰：父祖の廟。 ○瀝：清酒。（『楚辭』大招） ○龍：章樵注「龍、假借作襲。襲、重也。」 ○明衣：齋戒の時、沐浴後に身につける清潔な下衣。 ○穀：ちりめん。ちぢれ模様のある絹織物。 ○儷：章樵注「儷、偶也。祭祀用柔日。」 ○清濁：祭祀に

用いる酒の清濁。（『周禮』酒正） ○合疎明、綏離旅：章樵注「猶言會親疎、輯衆寡。管子（侈靡）「昭穆之離」注、離謂次位之別也。春秋（公羊・桓二）二國會曰離。禮記（曾子問）衆賓酬主人曰旅。」離は區別、旅は順序の意。

○有伊之徒：伊は伊尹のこと。湯王のために料理した話が『史記』殷本紀、『呂氏春秋』本味に見える。 ○五味：酸、甘、苦、辣、咸の五種の味。 ○勺藥：五味の調和していること。（司馬相如「子虛賦」枚乘「七發」） ○糴米：章樵注「言養之以米、所以滌其穢。」

○麇：一歳の鹿。 ○麇：二歳の鹿。 ○不行：章樵注「弋獵所供、無行販者。」 ○豨・獐：ともに獸の名。（章樵注） ○獨竹孤鷓：章樵注「竹屬通用。屬、玉、鷓、皆水鳥名。不牝牡則味全。」鷓はマナヅル。 ○被紙之胎：被は披、開くこと。紙は豨、豹の類（章樵注）。

豹の胎兒は珍貴な肴饌とされたことが『韓非子』喻老に見える。 ○麇：麇に同じ。くじか。牙のある小型の鹿。 ○蜂豚・應鴈・被鷓・晨鳧：章樵注「蜂、封古字通用、封大也。封豨之豚、應候之鴈、被鷓即斥鷃（ミソサザイ）、晨飛之鳧（カモ）、皆味

之美者也。說苑（卷十二）魏文侯嗜晨覺。」○戮鴟：野鴟、ガチョウ。○乳：鳥獸が子や卵を産むこと。○羔：小羊。○腳：たけねずみ。犬に似、竹の根を食べる。○鮫：鮫、いさぎ。ハゼ科の淡水魚。○孺：幼い、子供。○驚：きじ。○形不及勞：章樵注「食於杭田、未能飛、故不勞而肥。」○五肉：牛・羊・鶏・犬・豕の肉。（章樵注）○七菜：七草。ネギ・ニラの類。○腥臊：生臭いにおい。

そして孝心ゆたかな子孫は、それぞれの祖廟を尊び、鬼神の祭祀をおこなうには、ふさわしい日時を選び、清酒を用いて豫めみそぎをし、清潔な下着を身につけ、黒の絹織物を上着とし、佳き日を組み合わせ、酒の清濁をきちんと分け、親しき者と疏遠な者とを一同に集め、區別を守り序列を定めます。

そして伊尹のような者に味つけを調えさせ、うまみと甘みが釣り合い、五味の調和したスープを作らせます。（珍味には）江東のフグにアワビ、甘肅の牛や羊があります。米を買い入れ豚に與えて太らせますが、一・二歳の幼い鹿は（守られて）賣られません。大きな獐や獐の乳、連れない水鳥やマナヅル、フクロウの蒸し焼き、取り出したヒョウの胎兒、クジカの腦髓、水中を泳ぐ魚の脂身、大きな豚や旬の雁、ミソサザイに朝に飛ぶカモ、ガチョウのはじめて産卵したもの、山の鶴のすでに交わったもの、春の子羊に秋のタケネズミ、イサギのなますにカメ料理があります。うるち米の田のキジの子は、體が疲勞せず（肥え太り）、五肉七菜は、わずかな生臭みをも嫌います。精神を養い血液をつくることのできるもの、並んでいないものはないのです。

〔九〕

爾乃其俗、迎春送冬、^①百金之家、千金之公、^②乾池泄澳、觀魚于江（東平）。若其吉日嘉會、期於送春之陰、^③迎夏之陽。

侯羅司馬、郭范鼎楊、置酒乎榮川之間宅、設坐乎華都之高堂。延帷揚幕、接帳連岡。衆器雕琢、早刻將皇。朱緣之畫、邠盼麗光。龍蛇蜿蜷錯其中、禽獸奇偉鬣山林。

昔天地降生杜鄴密促之君、則荆上亡戸之相。厥女作歌、是以其聲呼吟靖領、激叻喝啾。戸音六成、行夏低徊、胥徒入冥。及廟嚙吟、諸連單情、舞曲轉節、蹈駮應聲。其佚則接芬錯芳、檐粘織延、躑淒秋、發陽春、羅儒吟、吳公連。眺朱顏離絳脣、眇眇之態、吡噉出焉。

- ①冬：九卷本闕。據『文選』蜀都賦劉逵注、二一卷本、『全漢文』補。守山閣本作「臘」。②金：九卷本作「斤」、據二一卷本、守山閣本、『全漢文』改。③送：九卷本、二一卷本、『全漢文』作「倍」、『全漢文』注云「疑作「涪」、下有空二格。今據守山閣本改。④乎：『藝文類聚』作「于」。⑤榮：守山閣本、『全漢文』作「榮」。⑥乎：『藝文類聚』作「于」。⑦連：九卷本闕、據二一卷本、守山閣本、『全漢文』補。⑧皇：守山閣本作「星」。⑨杜：九卷本、『全漢文』作「壯」、據二一卷本、守山閣本改。⑩戸：九卷本作「兄」、據二一卷本、守山閣本、『全漢文』改。⑪眺：『文選』鮑照「蕪城賦」李善注作「姚」。

爾して乃ち其の俗に、春を迎へ冬を送るに、百金の家、千金の公は、池を乾かし泄さらひ澳あひ、江に觀魚す。其の吉日の嘉會のごときは、春の陰を送り、夏の陽を迎ふるに期す。侯・羅・司馬、郭・范・鼎・楊は、酒を榮川の間宅に置き、坐を華都の高堂に設く。帷とばりを延き幕を揚げ、帳とばりを接し岡に連ぬ。衆器は雕琢され、早刻は將皇たり。朱緣の畫は、邠盼ひんぱんとして麗光なり。龍蛇は蜿蜷して其の中に錯まちはり、禽獸は奇偉にして山林ぬきんに鬣はつ。

昔天地の杜鄴密促の君を降生すれば、則ち荆に亡戸の相を上る。厥の女に歌を作り、是の以に其の聲の呼ばひ吟ずること靖領として、激さげび叻なき喝むせび啾なく。戸音は六成し、夏を行ひて低徊し、胥徒は入冥す。廟に及び嚙さん吟するに、

諸連は情を單くし、舞曲は節を轉じ、蹈馭せうさふ聲に應ず。其の佚い（侑）は則ち芬に接し芳に錯はり、襜せん・祐てんは織ほそく延び、淒秋を躡たんし、陽春を發し、羅儒は吟じ、吳公は連なる。朱顔の絳脣を離し、眇眇の態を眺むれば、吡ひつ・噉たん出づ。

○觀魚：春秋の魯の隱公が臣下の忠言を聞かずに務めを離れて漁の見物をしたことから、魚や漁を見て遊びふけることを言う。
〔左傳〕隱五）○迎夏：立夏の日に天子は夏を迎える祭を行なった。〔禮記〕月令）○侯・羅・司馬、郭・范・鼎・楊：それぞれ漢代の蜀都における名族。（章樵注）○榮川：うつくしい川。○閭宅：間は閑。靜かな邸宅。○早刻將皇：章樵注「藻刻、髹（漆を塗る）木器也。早、假借作藻、采繪也。將皇、璀璨華美貌。」○邠盼：繽紛。色彩のあざやかなさま。○麗光：華麗で、光をはなっていること。

○杜鄴密促之君・荆上亡兄之相：章樵注「蜀王本紀」曰「朱提有男子杜宇從天而降、自稱望帝、蜀人尊爲主。」杜鄴即杜宇、望帝姓名也。鄴音戶。按蜀紀、上古時蜀之君長治國久長、後皆仙去。自望帝以來、傳授始密。又云「望帝治汶山下邑曰埤、荆人斃靈死、其尸亡、隨江逆流而上、至埤而生。望帝以爲相、委國授之。」○密促：短期間で頻繁なこと。○厥女作歌：章樵注「成都古今記、

蜀王尙納五丁之姝爲妃、不習水土、欲出。王固留之、爲作東平之歌。無幾物故。王悲悼不已、乃作曳斜之歌・就歸之曲而哀之。」

○靖領：悲しみいたむこと。○激：噉に同じ。さけぶ、大聲で泣く。○戸：章樵注「戸讀若濩。濩者湯之樂。」○夏：禹の音

樂名。○胥徒：樂人、樂工。○入冥：奥深い所、空へ上ること。○廟：章樵注「望帝・斃靈皆有廟在蜀都、士女出遊必謁其廟。

依昔日之歌曲、寫之聲音、播之舞節、而獻於祠下。」○嚙吟：吟唱すること。（校注）○連：章樵注「猶後世之曲、所謂疊也。」

○單：彈に通ず。盡くす、盡さる。○轉節：詩歌の速度や調子を變えること。○蹈馭：舞踊の速度、調子。○佚：侑に通ず。

古代の樂舞の行列をいう。○襜：ひとえの衣。○祐：服のえり。（『方言』四、郭璞注）○躡淒秋・陽春：章樵注「淒秋・陽春

竝曲名。躡、以足踏地而歌。」○羅儒・吳公：古代の傳説に見える歌の巧みな人物の名。羅敷・虞公のことであるという。（章樵注）

○離：(唇を)ひらく。(張衡「思文賦」) ○絳脣：絳唇に同じ。あかい唇。 ○眇眇：風にかすむさま。(司馬相如「子虛賦」) ○吡：鳥の聲。 ○噉：噉に同じ。さげぶ。

そして蜀の風習では、春を迎えて冬を送る際、ゆたかな家、富裕な一族は、池の水をぬいて乾かし底をさらい、長江で魚や漁を見物して楽しみます。吉日には盛大な宴がはられますが、それは春の陰氣を送り、夏の陽氣を迎える日に定められます。侯・羅・司馬、郭・范・らう・らう・楊といった名族は、美しい川のほとりのしずかな屋敷に酒を用意し、華やかな街の高殿に席をしつらえます。垂れ幕をひき幕を掲げ、とばりをならべて岡につらなります。多くの器物は彫琢がほどこされ、漆で華やかな繪が描かれています。朱で縁どられた繪は、彩りあざやかで輝いているようです。龍や蛇はとぐるをまいてその中からみ合い、野獸や鳥はすぐれた姿を山林にほこっています。

昔、杜宇(望帝)は天よりこの世に生を受け(仙化せずに)やがて禪讓し、荆では失われた遺體から蘇った鼈靈が大臣とされました。蜀王の妃のために歌がつくられ、その死を悼んで歌は悲しげにうたわれ、泣き叫びむせび聲があがります。湯王の音楽は六たび演奏され、禹王の曲はゆったりと奏でられ、樂人は空へと上っていくようです。(望帝や鼈靈の)廟に出かけて歌をうたえば、どの節も思いが盡くされ、舞樂は何度も調子を改め、その調子に歌聲は呼應するのです。歌舞の列はかくわしい香りを漂わせまた振りまき、衣服はすらりと伸び、「淒秋」の曲を歌い舞い、「陽春」の曲を奏で、歌の名手が聲をのびし、更にまた名手が連れ立ってうたいます。美女が赤い唇を開き、かなたに姿を現すのを見ると、鳥は聲をあげ人々は歡聲をひびかせます。

〔十〕

若其遊怠魚弋、郟公之徒、相與如平陽、頴巨沼、羅車百乘、期會投宿。觀者方隄、行船競逐、偃衍撇曳、絺索恍惚。羅畏彌澥、蔓蔓沕沕。龍睢嚬兮霖布列、枚孤施兮織繳出、驚雌落兮高雄暨、翔雌掛兮奔繁畢。俎飛膾沈、單然後別。

①若其遊怠魚弋、觀者方隄：『文選』蜀都賦劉逵注作「若其漁弋郟公之徒、相與如乎巨野、羅車百乘、觀者萬堤」。②魚：『全漢文』作「漁」。③郟：九卷本作「群」、二二卷本、守山閣本、『全漢文』作「郟」。據『藝文類聚』改。④如平陽、頴巨沼：『文選』南都賦李善注、『全漢文』作「如乎陽瀕巨野」。⑤巨：九卷本作「臣」、據二二卷本、守山閣本改。⑥行船競逐：『藝文類聚』作「行船競逐也」。『文選』吳都賦李善注作「行舟競」、二二卷本作「行舡競逐」。⑦撇：九卷本、二二卷本作「撇」、守山閣本作「撇」、兩字音義不明。校注云「蓋撇之壞字」、今從之。⑧畏：『全漢文』注云「一作「隅」。⑨兮：九卷本作「房」、據二二卷本、守山閣本、『全漢文』改。⑩雌掛：二二卷本、守山閣本作「鷓挂」。

若し其の魚弋に遊怠すれば、郟公の徒は、相ひ與に平陽に如き、巨沼を頴、車百乘を羅ね、會を期し投宿す。觀る者は隄に方び、行船は競逐し、偃衍し撇曳し、絺索して恍惚たり。羅畏・彌澥は、蔓蔓として沕沕たり。龍に睢嚬し霖は布列し、枚孤の施かれ織繳出で、驚きし雌は落ち高き雄は暨れ、翔ける雌は掛かり奔るものは繁り畢く。飛びしものを俎にし沈むものを膾にし、單然として後に別る。

○遊怠：遊び怠けること。 ○魚弋：魚を釣り鳥を射ること。 ○郟公：郟公に同じ。古代の蜀の豪俠の名。（左思「蜀都賦」）
○平陽：平坦なところ。 ○頴：頴に同じ。見る。眺める。 ○行船：行きかう船。 ○偃衍：混雑すること。 ○撇曳：繁雑に

入り亂れること。○絺索：混亂するさま。○羅畏・彌解：ともに混雜するさま。○蔓蔓：はびこり廣がるさま。（『楚辭』九歌・山鬼）○沕沕：深遠なさま。○籠：籠に通ず。魚を捕らえる籠。○睢瞞：驚いて目を見張ること。○霖：水中に積み上げた柴で魚を捕らえる仕掛けのこと。○布列：廣く敷き並べること。（楊雄「校獵賦」）○枚：校注「猶言單個」。○孤：章樵注「孤即孤字。舟上網也。」孤は罟に同じ。魚を捕る大網。○織繳：鳥を射るのに用いる細い絲を繫いだ矢。いぐるみ。（司馬相如「子虛賦」）○睢：鷓、鶉に同じ。大型の鳥。（張衡「西京賦」）○俎飛膾沈：章樵注「猶旋取魚禽、以供俎膾、至暮、飛沈不可復取而後已。」○單然：孤獨なさま。

魚を釣り鳥を射て遊ぶ場合、郤公のような豪俠たちは、誘い合つて平原に出かけ、廣大な沼澤を眺めわたし、無數の車を連れ、約束を定めて休泊します。その様子を見物する者たちは土手にならび群がり、行き來する船は競い合い、混亂してひしめきあい、入り亂れて我を忘れていきます。雜踏の混雜は、廣がり深まります。魚籠びく（の多さ）は目を見はるほどで、柴の仕掛けは列をなして並び、ひと張り大網が廣げられ、いぐるみが放たれると、驚いた雌は落下し、高みの雄は昏倒し、天がける大鳥はとらえられ、獸は逃げて力盡きます。鳥はまな板に載せられ魚はなますにされ、（人々は）やがて一人ずつ別れていくのです。

附諸書引用箇所一覽

『後漢書』王符傳李賢等注。

『宋書』謝靈運傳所引「山居賦」自注。

『北堂書鈔』卷一四二、卷一五四。

『藝文類聚』卷六一。

『太平御覽』卷一五六、卷七五六、卷八二〇、

卷九六六、卷九七七。

『事類賦』卷二七。

『玉海』卷二四、卷一五一、卷一六九。

『李善注文選』：

班固「西都賦」、張衡「西京賦」、同「南都賦」、

左思「蜀都賦」、同「吳都賦」、同「魏都賦」、

鮑照「蕪城賦」、郭璞「江賦」、沈約「鍾山詩應西陽王教詩」、

謝靈運「入華子崗是麻源第三谷詩」、曹植「七啓」、

顏延之「三月三日曲水詩序」、王融「三月三日曲水詩序」、

劉孝標「廣絕交論」。